

---

# 龍の息子の放浪記

初心者の奴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍の息子の放浪記

### 【Nコード】

N3818BA

### 【作者名】

初心者 of 奴

### 【あらすじ】

龍神によって作られた主人公

素質はあっても経験が足りないということ

次期龍神を目指すため異世界へ行き 知識を育む

この作品は初めて投稿するものです

主人公最強（予定）などがあります

## 第一話 異世界に降りる（前書き）

これは、『上海アリス幻樂團』様による東方Projectシリーズの二次創作・幻想入り物です

原作無視などの可能性が無いとは限りませんので

それなどが不快に感じる方は戻っていただくのがいいかと  
では どうぞ

## 第一話 異世界に降りる

「で、話ってなんだよ親父」

「まあそう急かすな 今話す」

「はいはい・・・」

今俺は親父 もとい神様 いや龍神か？まあ最高神に呼び出された呼び出すというより 連れてくるのほうに合っている気がするが  
ま、そうでもないし他の奴と話す事ができないのだが

ココはなにかと不思議空間で 上下左右真っ白

他の奴と話したいならば ソイツの所に行くか 連れてくるかの2  
択なのだ

普通に歩いてたら 絶対に見つからないし  
というか上下左右真っ白な事から考えると 歩いているのが怪しい  
慣れてしまったが

「ワシがお前を作り出した理由は分かっているな？」

「ああ、簡単に言っと次期龍神候補みたいなもんだろ」

「まあ そういう事だ」

親父は龍神というだけあって でかい まずでかい

鱗一枚が俺と同じ大きさだし まっ 眩しっ 輝いてやがる 流石

龍神

ちなみに親父は口で喋っていない 念話とでもいうのか テレパシ  
ーとかそんなモノらしい

俺は口だぞ？ 人型だから

「その事なんだが・・・」

「・・・？」

「お前には素質がある　しかし経験が足りない」

なんか　うつ　ときた

面と向かって言われるとキツイかもしれん

「経験・・・というと？」

と　聞き返す

「お前は他者との触れ合いをしていないからなワシ以外と  
まあ他にもいろいろあるがな」

「で？　どうしろと？」

「最近新しくできた異世界があつてな  
そこにお前を送り込もうと思う」

「へえ・・・」

「しかしちよつと問題があつてな」

「ん？」

「その世界はいろいろと危険だ」

「え？」

ふう　と親父は息をはくと

「まあ　そんな危険な所にお前を投げ込むっていうワケには  
いかなので　能力を付与させてもらう  
あと武器も渡しておこう」

「あ・・・ああ　助かる」

危険な世界に丸腰で行くのは嫌だしな・・・

「ああ　ちなみにもう能力の付与は終わったぞ」

早ッ いつの間に・・・

「あとコレだ」

スッ と 剣が俺の前に現れる

「触っていいか？」

「ああ お前に渡すつもりだしな」

と 剣を持つてみる

「軽い・・・？」

軽いのだ 異常なほど

「それはな お前が人間状態の時に出来る力を吸うと  
鋭さや重さや強度が変わるんだ」

「・・・ん？ 人間状態って 今の俺以外にもなんか変わったりする  
のか？」

ああ そうだった と親父はため息交じりで言う

「今のお前は人間状態 そしてもう一つの状態が龍化 まあ龍化と  
いっても

尻尾が生える程度だ といっても人間状態時に使う力と龍化時に使  
う力は別物だな」

なんじゃそりゃ 初耳だぞ

「まあ すぐなれるだろ 尻尾が生える想像でもしてみろ」

「いやな想像だなソレ・・・」

と まあ軽く想像してみると

「うつ・・・？」

シュルツ と

一本の細長く 先っぽがものすごく鋭い尻尾がでてきた

その瞬間、剣の重さが変わる

「なるほど・・・ 確かに違う感じた」

「軽く説明をしておこう」

いきなり親父が喋り始める

「人間は一般的に霊力と呼ばれるモノが使われる

お前が人間状態時ならば霊力を使える

その剣に吸われた力はおそらく霊力だろう

そしてもう一つ その龍化時なら神力というモノが使える

正直言つてこの神力を使うには色々と面倒なものがあるんだが

お前は例外だ 生物が普通に生きているだけで お前に神力が入ってくる」

「ちょっと待て 神力ってのは他の奴から貰うモノなのか？」

「えーとな・・・ 他の世界から見ると限り 信仰というものが多ければ多いほど

その神の持つ力は強いんだ」

「けど俺は生物が生きてるだけでその力を貰えると なんて？」

率直な疑問を聞くと

「そりゃ ワシがこの世界全部作ったから」

親父は規格外だった

「あとコレ持って行け」

上からヒュー と長方形の箱が落ちてくる

「おっ・・・と」

パシッ と受け取る

その箱を開けてみると

「これって・・・葉巻？」

「そうだ葉巻だ」

別世界で見た事がある

火付けて吸う奴だ

「ちなみにこの葉巻は特別製でな・・・

有害分をすべて取り除き

少し使っただけで落ち着けるといふ優れものだ！」



良く分からんが 素晴らしいようだ

「そっぴゃ思っただけだ なんて俺って人型なんだ？」

「葉巻はスルーか・・・ まあ人型なら応用が効くかと思ってな 不満か？」

「いや 大丈夫だ もう慣れたし 今更変えたってな・・・」

「今更？ お前 いくつになる？」

「地球にいと仮定したら えーと・・・ 軽く9846歳くらいだ ったかな」

「なんだ もうすぐで一万じゃないか」

「だなあ」

今思つと この真っ白な空間でよくそんだけの時間生きてきたものだ

「それじゃ そろそろ送るぞ 剣はいいか？葉巻はいいか？」

「まあ 大丈夫だ」

「では 送るぞ」

すると親父は黙り込む

10秒後、俺を囲うように文字が現れる

「では 送るぞ 幸運を祈る」

「ああ んじゃ行ってくる」

親父に向かって軽く手を振る

瞬きすると もう親父は目の前にいなかった

「ん・・・」

目を開けると 別世界

湖があり 森があり 地面があり 空がある

腰の剣 葉巻をチェックすると

「よし 行くか」

俺は 新しい世界への第一歩を踏み出した

## 第一話 異世界に降りる（後書き）

原作キャラでてません すみません  
意見 感想 指摘 待っています  
では

## 第二話 は？怪物？ふざけんな（前書き）

こんにちわ 一応自己紹介を 初心者の奴と申します  
名前通り初心者なワケで、不可解な点やハア？となる部分があるかもしれません が まあ駄文ってヤツです  
駄文は駄文でも何回か書いてればマシになるだろうと願って書き続けようと思います

注意事項は以前と同じ では どうぞ

## 第二話 は？怪物？ふざけんな

「そらっ」

「グベッ」

ドサツと音を立てて倒れる化け物  
化け物・・・まあ狼みたいな奴だった

一応あれから100年ぐらいたって 力の使い方とかマスターした  
つもりでいる

神力を手の平に集め 圧縮し形を整える  
形は 槍 やはり飛び道具は必要だろうと思い 槍の形をよく使っている

え？もう100年たったのかって？  
それまでの話してもいいけど  
ただ毎日毎日座ってるぐらいだよ？

しかもそのころまだ植物以外に動物がいなかったし  
最近になってこういう襲ってくる化け物が誕生し始めたんだ  
まあ 敵じゃないが

「あー・・・ きつたねえ」

さっきの狼の化け物を槍の形をした神力で貫いたら  
結構血が出て かかってしまった

「服はいいけど・・・顔についたのは落としたいな」

ベチャ と頬についた血を拭う

「そついや湖ってどこにあったっけか・・・」

ずっと前、大きな湖があったんだが どこにあったか忘れてしまった

ガサツ と 草を踏む音、

忘れてた ここ森だったんだ

周りには木 木 木

ちなみに さっきの音は俺ではない

別の何かが・・・いる？

おそらく さっき殺した化け物の血の匂いでも嗅いできたのだろう

「さっさとここから離れるとするか・・・」

と 俺がこの場を去ろうと足を踏み出した瞬間

「グオオオオッ！」

目の前の木の後から見事なステップを踏んで 俺に飛びつこうとしてくる化け物、ちなみにこれも狼

俺はそれを 殴り飛ばす

「ゲギヤッ！」

近くにあった木に当たり 気絶

何故避けなかったかって？ 面倒だからだよ

「やっぱ湖探して血落とすか・・・」

俺はその場から全速力で脱出した

「ふー・・・」

ここは湖、やっぱ水はいいな 生き返る

「さて・・・服どうすっかな」

問題は 服

顔や腕など素肌についたものはすぐ洗い流せるのでいいんだが  
服はそうもいかない

着替えがあつたらいいんだが そんなモノは今は無い

「うーん・・・どうすっかな」

困った困った

俺の能力にそんな力があつたらよかったのに・・・

あ、そういえば能力を使えるようになったんだよな

この尻尾を出している状態だと 火水風土雷を操る事ができるらしい  
神力を使えば それを元に生み出す事も可能

人間状態だと奪う、複製する能力のようだ

ちなみにこの能力は俺が使う相手に触れていないとダメのようだ  
試してみた結果、血でも可能だった

触れているというより 体のどこか、もしくは体液が付けば使える  
らしい

ズシン ズシン ズシン

・・・何だ？ すげえでかそうな奴がきそうな気がする

「グオオオオオオオオオオオオ！！！」

「うおおおおっ！！？」

ものすげえ力振りまきながら現れた四本足の・・・化け物

なんだコイツ・・・でけえ しかもここらへんじゃ見なかったぞこ  
んなヤツ

すると四本足の化け物はこっちを向き・・・ こっちを向き・・・？  
突進してきた

「畜生！予想通りかよッ！」



俺はその場から思いっきり横へ跳び　化け物の突進を避けた

ズガガガガ　と音をたて　その化け物は速度を落とす

しかし　なんだコイツ　どっかで見た事あるような・・・

そうだ　アイツだ　なんかの本に書いてあった・・・えーと・・・  
名前は・・・

「グオオオオオオオオオオオオ！！！！」

突進

突進

突進

あまりにも直線的すぎるため　避けるのは苦じゃない

名前・・・名前・・・　そうだ　ベヒモスだ

どっかの世界の旧約聖書とやらで、陸に住む巨大な怪物・・・だったな

あの内容では性格は温厚だったはず・・・

「グオオオオオオオオオオ！！！！」

だった・・・はず・・・

今言える事は　目の前にいる化け・・・怪物は敵、倒すべき存在だ

「よし　行くぞ」

俺は尻尾を出し　神力を手の平に集め　槍の形を作る

「そんでもってこの上に　神力で生み出した炎を纏わせて・・・」

槍を包むように燃える炎 名づけて・・・

「神槍『神火不知火』」

我ながら ふざけた名前だと思うけど 威力は保障する！

「喰らつとけッ！」

俺はその槍を思い切り投げつける

その槍は相手に動く隙も与えず ベヒモスの頭を貫く

ズウウウン・・・ と 鳴き声も上げずに地へ倒れる

頭からは大量の血が流れ出ている

しかし貫くとはな・・・ そんで即死

俺は新しい技の威力に気分が高揚していた

「ま、せっかく倒したし コイツの持つてる力頂きましょうかね」

俺は人間状態になり 奪う能力でベヒモスの亡骸から力を盗る

「ふうん・・・ 結構力持ってたんだな・・・」

俺は力をすべて奪うと 他に何かいないか探してみる事にした

「イヤイヤイヤイヤ・・・」

空には鳥 うん 鳥 鳥なんだが・・・

これまだデカイ そしてそこらへんのヤツと比べたら全く違う力を持つてる

俺は今、近くにあつた山を駆け上り

その鳥に近づこうとする

と その鳥は 俺に気付き 突っ込んできた 何故来るんだよ・・・  
これまた結構な力を持つてる怪物 さっきのをベヒモスとするなら  
コイツはジズだろう

「空か・・・ 一発で殺れるといいんだが・・・」

正直不知火を撃つのは結構つらい

神力を圧縮し 槍の形にする ここまでは慣れたんだが  
その上に炎を纏わせ威力を上げる というのがとても難しい  
少し力の調節を間違えると炎が消えたりする

「これもまた修行か・・・」

さっきの相手はベヒモスで 動きが多少遅かったので狙いやすかったのだが

今回は空を飛ぶ相手 不知火の速度も中々のものなのだが これを相手に撃ったとしても避けられるというのが分かる

と、いうワケで

神力で槍を生成 その周りに雷を纏わせる

雷の速さを活用しようと考えた

またその上に炎を纏わせれば 速度ともに威力の問題も解決なのだが これまた調整が難しい

タダでさえ 一つ纏わせるだけで精一杯なのに 二つも というのはキツイ

「ま、そこらへんは後でどうにかしよう」

槍の準備は完了、あとは当てれるか否か だ

ジズはまるで俺を遊ぶかのように空中飛行を楽しんでいる

畜生・・・俺は飛べないってのによ・・・！

俺は狙いを定め 放つ

バシユウ！ と音をたてて風を切り裂き音を乗り越え標的へと突き進む

グサツ と 見事に首を貫通 あの時さにはジズさえも避けられなかったようだ

ジズは地面にドスンと音をたて落ちた とうか落としてやった

ジズの亡骸の近くまで行き 人間状態になり ベヒモスと同じように力を頂く

フム これまた大量大量

さて 二匹の怪物を潰したワケだが この順序で行くともものすごく面倒くさいものが待っている

陸のベヒモス 空のジズ そして最後に海のレヴィアタン

俺はどっちかつーとリヴァイアサンと呼ぶので そっちで呼ぶことにする

ベヒモスは最高の生物 そしてリヴァイアサンは最強の生物と呼ばれている

という事は ベヒモス ジズのように一筋縄でいかない可能性が大 とうかいかないだろう

「あー・・・どうすっかなあ 尻尾一本・・・いや3本全力で一気

に・・・うーん」

ちなみに100年生きていて分かった事だが

尻尾が増えるたび力が増えるらしい　まあ俺にとっては力が増えるというより制御みたいなモノだが

だって　神力って自分じゃ作れないし

まあ　俺は尻尾を増やすと　元あった神力を開放　制御をどんどん解いていくって感じ

と　気付ければ海

結構綺麗な浜辺だなー　と海を眺めていたら・・・

バsshアア

海から龍がでてきた　体の全体像は下が海に入っているので分からないが　十分でかい

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

すっげえ高い音、これがコイツの鳴き声か！

するとその海の龍　おそらくコイツがリヴァイアサンであろうモノが

口から水球をはいてきた

しかもご丁寧に力を織り込んだ状態で

「ちつくしゅー！」

俺はその場から思いっきり離れる

バシヤッ！

その水球がぶち当たった地面は小さなクレーターが出来ていた

「おおう 怖い怖い」

ふざけているようだが 本心である

「仕方ない 全力出すか・・・」

俺は尻尾というなの制御をすべてはずす ちなみに俺の最大は3本

「よし・・・やるか」

俺は靈力に呼応する剣を構える

ちなみに龍化する前靈力をたっぷり注ぎ込んだので 軽いし 鋭いし 硬い

龍の息子と 最強の怪物の戦いの火蓋が斬って落とされた

## 第二話 は？怪物？ふざけんな（後書き）

はい ここまでです

全然進みません ごめんなさい

意見 指摘 感想などくれたら嬉しいです

そういや主人公の名前だしてねえな・・・

では



## V S 最強の怪物リヴァイアサン（前書き）

こんにちわ 初心者です

安定の駄文ですが ここまできたなら読んじやってほしい  
頼みます では どうぞ

## V S 最強の怪物リヴァイアサン

「うおッ!？」

「……………!!!」

目の前には 水球 水球 水球

「おいおいおいおい……!」

俺は意を決し、剣を構える

ここまできたら逃げれない なら!

目の前に迫る水球、俺はそれを見つめ間合いを確かめる

今だッ!

剣を鞘から抜き そのまま水球を斬る

ピシャッ

見事に水球は二つに斬る事ができた 俺の左右に切り分けられた水球が落ちる

バシヤッ

斬ったせいで速度が落ちたのか 威力は少なく軽く地面をへこませ

る程度だった

いや・・・へこませるってのもかなりの威力だな・・・

そして俺はリヴァイアサンへと目を向ける

中々の威圧感　しかし俺の親父には敵わない

どうする　このまま体力を削りあっても相手の力は不明、俺もかなりの体力を持っているが

アイツのほうが体力が多いという可能性も無いわけではない

なら　さっさとケリつけたほうがいいか

「神槍」

俺の右手に神力で作られた槍が生成される

「神槍を神力で包め　そして神力を炎に変換」

ポウツと　荒々しい炎が槍を包む

「神槍を左手に生成　そして神力で包め　その神力を雷に変換」

バチバチツと　音をたてながら雷が槍に付く

正直　二つ上乘せが無理なら　一個づつと思ったが　案外できるもんだな

「・・・ッ!？」

なんだ この感じ

まるで槍に引き寄せられるような・・・ッ！

「ハアッ ハアッ・・・ な・・・なんだ・・・？」

なにかが槍に吸われた感じがする・・・ なんか眩暈が・・・ お  
っと まだ戦闘中気は抜けない

俺はリヴァイアサンをじっと見る

するとリヴァイアサンは口を閉じた・・・なんだ？

その瞬間口の中で膨大な力が溜められていた

「おいおい・・・ どんだけ力練りこむんだよ・・・」

その力の膨大さはさっきの水球とは比べ物にならないほどのものだった

くっそ・・・ アイツはアイツで力溜めてるし

俺の攻撃はおそらくあの硬い鱗で弾き返されて終わりだ  
どうすりゃいい・・・

アイツは今口に力を溜めてるし・・・ん？

そうか口だ！ アイツが攻撃した瞬間口の中に投げ込めばいい！

今、アイツは口の中で力を練りこんでいる しかも閉じて

おそらくあれだけの力のものを吐き出したあと すぐ口を閉める事はできないだろう

多少なクールダウン的なものは必要なはず　その瞬間を狙う！

しかし、あの攻撃の威力は未知数　撃つ前に俺が吹っ飛ばされるかもしれない・・・

リヴァイアサンがこちらを向いた　・・・そろそろくる・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！！」

ドンツ　と口が開かれ攻撃が放たれる

「今ッ！！！！！！」

俺は二つの槍を思いっきり口えと投げ込む　ちゃんと相手の攻撃の軌道線上とは別のところからな？

俺は投げたあと　その場から右へ思いっきり跳躍した

「逃げ切れるか・・・！？」

ズドオオオオオオオオ

大きな爆発音が後のほうで聞こえる

俺は爆発さえ喰らわなかったが　爆風に耐え切れず　吹っ飛ばされた

「くっくっくっくッ！」

木々を思いっきりなぎ倒しながら打っ飛ばす俺

最後にでけえ岩に思いつきりぶつかってやっとなまった

「ぐう・・・ 神力で身体強化しといてよかった・・・ あんま痛くねえ」

俺は背中に異常が無い事を確かめると さっきまでの戦場に跳んでいった

悪魔でも跳んでいった 俺は飛べないからな

まっさら

ただ一言 まっさら

近くにあった森 岩 地面 全部吹っ飛んでやがる

おかげで海が広がった まあ どうでもいいが

それよりも結果だ 結果が大事

俺はリヴァイアサンを探した

すると元々浜辺だったところに力無く横たわっていた

念のため警戒しつつ近づいて行く

「・・・フム 完璧に気絶してるな・・・

大して怪我してなさそうだな

畜生俺の大技くらって平気命に別状が無いとか・・・怖いもんだな・・・」

一応尻尾フル（3本）状態で本気技したら後々怖いので一本くらいの威力に弱めたのだが

こつも致命傷が無いとなると正直悲しいかな・・・

さて・・・どうすつかなあ・・・

このまま奪う能力で力頂いてもいいんだがなあ・・・

こんなに強い奴にあった事ないし

俺一人じゃなんかアレだし 慣れてるけど

・・・？

おかしい

軽くリヴァイアサンに触れてみたのだが

何かがおかしい ものすごく弱っている 何故だ・・・？ 身体に全く外傷など見られない

しかも口の中を覗いても 俺の攻撃は大して効いていなかった感じだ

「・・・くっそ どうなってんだ！」

コッッ

「いてっ」

なんか降ってきた

本のような 手にとって開いてみる

目次

P 4 結界の作り方

P 1 9 結界の作り方 応用編

P 5 6 札の作り方

P 7 1 札の作り方 応用編

・・・って！ なんだコレ！

こんな事してる暇じゃ・・・ ん？



P 5 6 7 治癒魔法 状態視察

状態視察・・・？      これならコイツの今の状態がわかるかも・・・

ええつと・・・なにに？

まずP 7 8 0に付録されている札を取り

そこに自分の力を注ぎ込み

相手の額に置く

フム それで？

札越しに手をおき    多少待つ

この時、札に書かれている文字が消えます

状態視察を終えるとまた浮き上がります

その浮き上がった文字に書いてある事が    対象の相手の状態です

注意これは人型のみ有効

「マジかよおおおおッ！！」

ここまで読ませておいてこのオチか！    ふざけんな！    先に書け！

・・・ん？

P 1 9 8 3 生物に別の生物の形を被せる方法

・・・ いける    これはいけるはず

「よし やるか」

俺はP2056に付録されている札をとり

自分の親指の腹を噛み切り

そこから出る血で文字を書く

そして真ん中に○と書き

その○の中に人と書く

「よし そんでこれを使いたい相手の額に置いて・・・

その人という文字を隠すように手を置いて 自分の力を込める！」

すると リヴァイアサンの身体が青白く光り、人の形へとどんどん

変わっていく

やった 成功だ！ と俺は思った その時

「うつ・・・！？」

同じ感じ さつき槍を生成した時と同じ感じだ

眩暈がする 意識が飛びそうだ

俺はついついその場で膝をついてしまった

「ぐっ・・・う・・・ はぁ・・・治まったか・・・」

はぁ・・・ 一体なんなんだこれは・・・

「・・・よし もう動けるな ったく・・・」

と 俺はリヴァイアサンだったものに目を向けた

ちゃんと人の形をとっている・・・ ふう よかった・・・

ちなみに せめて言葉を喋れるようにと 札の中の呪文に書き加えておいた

流石応用編 助かりました

近づいてみると 性別は女性のような 水色の長髪 顔は整っていて なんつか 凛々しい という感じ

「・・・って！落ち着いてる場合じゃねえ 状態見ないと！」

流石に水に浸かったままではまずいので 場所を変える

洞窟、少し前俺が無理やり打っ壊して作った

入り口は細く長く そして奥まで進むと広い

ど真ん中に俺の神力の塊を置いてある

それから少しづつ神力が漏れ出すように調整し

漏れ出した神力を炎に変換している

近くで寝てる女性 もといリヴァイアサン 意思疎通できるように

言葉を入れ込んだはずだが・・・ 効いてくれますように

先ほど あの本に書いてた状態視察を使ってみたら 今は全く問題無し

なんであんなに弱っていたか疑問だったので 応用編に書いてある

相手に起こった身体の異変を全部調べる というすげえやり方で調べた結果

俺の使った神槍によつて肉体ではなく精神、心を削ったらしい

何故こんな事になったのか ついでに俺の身体の異変も調べてみた  
そしたら

神槍に俺の魂が吸われたらしい なんて恐ろしい！ 今の俺は大丈夫なのか！？

と、滅茶苦茶慌てながら調べたのだが 心は順調に回復していて今は全快だという よかった・・・

ちなみに リヴァイアサンの魂を削って 大丈夫なのか という事

だが

その削った部分に入り込むようにして 俺の心がスルリと入ったら  
しい

おそらく人型にしたときだろう 俺の心は俺の心なので やはりリ  
ンクしている

すなわち 俺の心が相手にある その相手に俺の心は読まれてしま  
うと同時に

相手の心も読めてしまうという事

ああ なんとこの事でしょう

「ん・・・むう・・・」

・・・と 起きたかな？

「おい？」

「へ？・・・ あっ・・・貴方はッ！」

俺の姿を確認すると同時に戦闘モードへと移行するリヴァイアサン  
やめてくれ 怖いから

「え．．．？　ど．．．どという事だ？　貴方の声が私の中で．．．え？　え？」

まあ．．．　こうなるわな

「しっ　知っているんですね！　何故こんな事になっているんですか！」

と、思いつき指を刺して言うてくるリヴァイアサン　なんか『ずびしっ』って効果音がついてきそう

「何言ってるんですか　あとリヴァイアサンってのはなんですか？」

「あー　そつか　本人自体は知ってなくて普通かもな．．．　まあ　順をおって話す　危害は加えない　まず座れ　そして聞け」

「は．．．はあ．．．」

龍説明中．．．

「それはつまり私の命を貴方が握っている　と？」

「ま、それに近いかな」

俺の心がコイツの心から抜ければ　また心は削られた状態となり  
弱る

ちなみに俺は規格外　自然治癒するようだ　ありがたや

「・・・私はどうすれば・・・」

orz　という状態で落ち込むリヴァイアサン

「選択肢は二つ　俺と離れ　心が削れた状態でそのまま死ぬか  
それとも俺に忠誠を誓い　一生付いてくるか」

ま　流石に迷うだろうな・・・　俺と離れるとかいっても無理矢理  
連れてくけど

するとリヴァイアサンは

「分かりました　貴方に忠誠を誓います　どちらにしろ私は貴方に  
負けました　好きにしてください」

「えっ？」

「何回も言わせないでください　忠誠を誓います　私は貴方につい  
ていく」

えっ・・・あれ？　潔すぎる・・・　まあ　いいか

俺は思わず笑っていた　なんか久しぶりに笑った気がする

「なっ！？何をいきなり笑っているんです!？」



「あ？ ああ いや なんか さ・・・」

「なんか？」

「嬉しくつて さ あはは」

なんか 嬉しかった

今まで一人だったって事を考えると 尚更

俺としては一人でも平気って思ってたけど それは上っ面だけだったみたいだ

「何が・・・嬉しいんです？」

「誰かと一緒にいれること だな 長年生きてきたけど ずっと一人だったし」

するとリヴァイアサンは は？ という顔をして

「長年？ 貴方は一体どのくらい生きているんですか？」

聞いてきた

「えーとな・・・今9946歳かな・・・ もうそろそろ9947歳かも」

「えっ!？」

めっちゃビックリしてる　そこまでビックリするか・・・？

「私はまだ3000年程度しか生きていないのに・・・」

「そりゃそうだ　この世界できてから7000年くらいしかたってないし」

「ハア！？」

リヴァイアサンが意味分からん！って顔で言いやがった　まあ　軽く説明してやるか

龍説明中

「で、親父は神だと」

「そういつごと」

「へえ・・・」

なんか疑い半分吃驚半分って感じだな・・・

「あのさー」

「なんです？」

「リヴァイアサンって長いから 今度からリヴァって呼ぶけどいいよな？」

「いいんじゃないですか？ 私は元の名前すら知りませんし」

そうだったな ハハ

「で、一応お前は俺の下僕……いや違う従者って感じのものになつてもらう  
その事でだな」

「その事で？」

「こういう二人っきりの時は碎けた喋り方でいいんだが  
他の意思疎通のできる生物とかが誕生した時は上下関係をハッキリ  
させるために  
敬語……いや敬語はもうできてるしいいか それ以外は命令に従  
ってくれればいいや」

「成程、ならなんと呼びます？御主人様と？」

「やめてくれ 虫唾が走る せめて名前で」

「いえ……私は貴方の名前を知りませんので……」

「あ そついやそつだったな 俺は隆司<sup>リュウジ</sup>だ」

「そつですか なら隆司……様？」

「そこらへんはまかせる」

「分かりました」

「さてと！」

「さてと？」

「寝る」

「・・・あ ハイ おやすみなさい」

俺がねっころがるとリヴァは周囲を警戒する 周囲っていうより  
入り口を警戒してる

「大丈夫 さっき見た本で外に探知結界と入り口に遮断結界張って  
あるから

そこらへんの奴等は絶対に入ってこれない」

「凄いですね・・・さっきのものをすぐ活用できるとは」

「無駄に長く生きてないよ というかまず俺寝なくてもいいのにな  
アハハ まあ寝るよ オヤスミ」

サイド リヴァ

不思議な人？まあ神様だ

戦っている最中はとても恐ろしい程大きい力を持っていたのに

素は結構温厚なようだ

・・・温厚ではないか・・・あの二つの選択を迫られた時 心の  
声では

『俺と離れるとかいっても無理矢理連れてくけど』

思いつきり聞こえていた まあ私としても死ぬのは嫌なので 忠誠  
を誓うだろう

・・・やはり 身体は疲れてるみたいだ 私も休ませていただく・・・

「おやすみなさい 隆司様」

私はそう言つと 横になり 目を閉じた

## V S 最強の怪物リヴァイアサン（後書き）

お疲れ様です

やっと次へ進めそうです

新しい仲間？リヴァイアサン まあノリですねコレ

意見 指摘 感想 お待ちしております

誤字、脱字も教えていただけると助かります

あとアドバイスも

では おやすみなさい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3818ba/>

---

龍の息子の放浪記

2012年1月10日20時57分発行